

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：13601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2017

課題番号：25893083

研究課題名(和文)療育を必要とする児とその家族(父親)への支援に関する検討

研究課題名(英文) Study of family support for children with developmental disabilities focused on their fathers

研究代表者

石田 史織 (Ishida, Shiori)

信州大学・学術研究院保健学系・助教

研究者番号：20710065

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,070,600円

研究成果の概要(和文)：発達障害児の父親の多くは、生活上の世話やしつけ等を中心に育児を担っていた。また、配偶者からのアドバイスや児との関わりをとおして障害や児の特徴に理解を示していた。そして、療育的な関わりや心持ちで児と接し、父親自身も成長していることが考えられた。しかし、児の理解や育児等に不十分さがあり配偶者からストレスと捉えられていることも伺えた。実際、父親はソーシャルサポートを受ける手段が母親に比較すると少ない状況にあり、サポート相手が配偶者に限局していることや“父親同士のつながり”と“学ぶこと”をニーズとして求めていることから父親への育児支援体制整備やピアサポートの実施の必要性が急務であることが明確になった。

研究成果の概要(英文)：Many fathers of the developmental disabilities child were taking care and the discipline in life. In addition, the advice from the spouse and the relationship with the child showed understanding of the disorder and the child's characteristics. It was thought that it touched the child by the rehabilitation relation and feelings, and the father had grown up. However, the child's understanding and the child care were insufficient, and it was able to be seen to be taken from the spouse by the stress. In fact, the father is in a situation where there are few ways to receive social support compared to his mother, and the support partner is confined to the spouse and "the connection between fathers" and "learning". It was found that it was urgent to develop a support system for fathers and to carry out peer support.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：発達障害児 家族支援 父親 療育 育児

### 1. 研究開始当初の背景

0～5歳児は身体や精神面の発育や発達著しく、育児をとおして親の関わりが最も必要とされる。しかし、昨今では育児不安や育児負担を訴える保護者は増加しており、自治体でも母親を中心とした育児支援に重点的に取り組んでいる<sup>1)</sup>。

療育が必要とされる発達障害児の場合、親の育児負担や不安は特徴的で、それに見合った支援の必要性や重要性は高いと言われる<sup>2)</sup>。発達障害者支援法でも、発達障害の早期発見・支援に努め、かつ適切な措置を講じることと家族も重要な支援者として障害受容や発達支援方法に十分配慮した支援を行うことと示されている。そして、施行後約10年を経過した現在においても、支援の重要性はより一層求められている<sup>3)</sup>。しかし、育児を中心とした家族への支援検討に関する先行研究では、母親を対象としたものが多く、父親を対象としたものは少ない。また、母親を対象とした先行研究では、発達障害児の家族支援において父親が発達障害児・母親(配偶者)・発達障害児のきょうだい・他家族員・社会など様々な対象と良好な関係性をもつことが重要だと述べられている<sup>4)5)</sup>。そのような良好な関係性を構築するための父親の発達障害児への具体的な関わりについては明らかになっていない。

そこで、療育を必要とする発達障害児の父親を対象に、父親の行っている育児内容や関わり方、それに伴う感情、支援者側へのニーズを明らかにしたので報告する。

### 2. 研究の目的

発達障害児の父親の育児内容や児との関わり方、それに伴う心持ち、支援者側へのニーズやそれに関する母親との共通点や相違点、ソーシャルサポートとの関連性を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

調査を2段階で実施した。

一次調査では、対象者である発達障害児の父親の実態を具体的に示すため質的調査を実施し、二次調査では傾向を示すため一次調査の結果を反映させたアンケートを作成し対象者の規模を拡大させ量的調査とした。また、夫婦関係や地域社会との関連などの生活に満足していることは、父親と母親の両者の育児を含めた様々な不安度を低下させる<sup>6)</sup>ということからも母親に対して同時に調査を行い、母親・父親間との比較を行い、父親に焦点をあてたより具体的な家族支援を検討した。

#### (1)一次調査

##### 1)調査対象・時期

2014年12月～2015年1月に長野県内の療育施設利用者・登録者かつ未就学児で、調査に了解を得られた2施設に通う発達障害児も

しくは疑い児の父親98名を対象に調査を実施。

##### 2)調査方法・調査内容

無記名自記式調査紙を用いた質的研究を実施した。調査票は、各施設職員の協力を得て対象者本人または家族に直接手渡しで88名に配布した。回収は同封した返信用封筒にて各自投函してもらうよう依頼し、調査票の返送により調査への参加同意が得られたとみなした。

##### <1>基本属性

年齢・職業・家族構成・同居家族・発達障害児(以下、児とする)の性別・年齢・出生順位・療育施設利用開始時期・療育施設の利用期間とした。(表1)

##### <2>設問5項目(自由記載)

父親が担っている児への育児内容  
児と関わるときの意識・思い  
療育による育児行動や意識の変化  
同じ境遇にある父親に聞きたいこと  
児と関わるうえで必要な支援

##### 3)分析方法

基本属性は単純集計し、自由記載は各項目に対応する内容を整理した後、対象者の記載内容をそのまま利用して内容を最もよく表している端的な文章を作成し文節とした。そして、類似した文節のまとまりを作成し、項目、領域と分類整理をすすめる内容分析を行った。尚、信憑性を確保するためスーパーバイザーをまじえて分類整理を行った。(表2)

#### (2)二次調査

##### 1)調査対象・時期

2016年7月～9月に長野県内で就学前児を対象に療育を行っている療育施設(39施設：平成27年度現在)を利用している児の父親・母親(約3000名)を対象。調査前に対象者が利用する施設長へ調査協力依頼と調査対象人数の報告依頼を行い、施設長より承諾を得られた施設の対象者でかつご本人の承諾を得られた場合のみ対象とし自記式調査紙郵送法で調査を行った。

##### 2)内容

##### <1>基本属性(表3)

父親・母親の状況、発達障害児の状況

##### <2>育児に関する実状や思いの共通点や相違点(表4)

子どもに関する父親・母親の認識  
育児状況  
関わる時間、関わり方、育児  
ストレス  
育児に関する社会との関係

### <3>ソーシャルサポートとの関連性

#### ソーシャルサポートの利用状況（内容・提供者）

副次的評価項目である<1>・<2>は、2014年に実施した基礎調査を元に質問項目を作成し、主要評価項目である<3>は、太田ら<sup>7)</sup>が作成した項目を参考に、道具的サポート、情緒的サポート、情動的サポート、評価的サポートの4種類とした。4種類の枠組みの中で、山下ら<sup>8)</sup>が作成した「発達障害の母親が抱える生活困難に関する事例のコード・マトリックス」と藤田ら<sup>9)</sup>が作成した「ASD児を持つ母親が認知したソーシャルサポート」の項目を参考に、基礎調査の結果を合わせて質問項目を作成し、実際の利用状況を調査した。父親・母親間で<1>、<2>との関係をMann-WhitneyのU検定を用いて確認し、<3>は多変量解析を行い、影響を確認する。

## 4. 研究成果

### (1) 一次調査

対象者の年齢は、30歳～49歳の範囲で、平均38.4±10.6歳であった。家族構成は核家族34名(87.2%)、で核家族が大半を占めていた。児の平均年齢は3.95±2.05歳、男女比は8.5:1.5であった。(表1)

表1 対象者の基本属性(1次調査)

		全体(N=39)
年齢 <sup>1)</sup>		38.4±10.6
職業 <sup>2)</sup>		
	会社員	28(71.8)
	自営業	2(5.1)
	公務員	1(1.2)
	医療職	2(5.1)
	その他	6(7.1)
家族構成 <sup>2)</sup>		
	核家族	34(40.5)
	実父母と同居	3(3.6)
	義父母と同居	2(2.4)
児の年齢 <sup>1)</sup>		4.0±2.1
児の性別 <sup>2)</sup>	男児	33(84.6)
	女児	6(15.4)
診断の有無 <sup>2)</sup>	診断がついている	33(84.6)
	診断がついていない	4(10.3)
	不明	2(5.1)

1) 平均値±SD

2) 実数(%)

表2に示すとおり、領域ごと項目に対応した文節を示した。父親は、生活上の世話やしつけに類することを中心に育児を担っていた。また、専門家・配偶者からのアドバイスや児との関わりをとおして障害や児の特徴について理解を示していた。そして、療育的な関わりや心持ちで児と接し、父親自身も成長していることが考えられた。さらに、父親は“父親同士のつながり”や“学ぶこと”をニーズとして求めており、父親の特性を考慮したインターネットやSNSをツールとした育児に関する不安や疑問を解消できる体制整備やピアサポートの実施の必要性が伺えた。

表2 児への育児内容及び児の成長を支える父親の関わり方と父親のニーズ

領域	項目	文節
育児の内容	生活上の世話	日常の世話、妻(母親)不在時の代わり、療育参加、診察同行、通園・通所送迎、遊び、読み聞かせ
	しつけに類すること	良いこと・悪いことを教える、日常ルーチンを守る等
児との関わりへの意識や思い	子育ての心がけ	子どもを怒らない、理解に努める(関わる時間が短くてもよく観察し理解する) 子どもができたことを褒める(肯定的な言い方、療育の方針を参考にする、子どもを受け入れる)
	障害との向き合い方	障害に対する心構え(健常児のお子さんと比較しない、特別扱いしない、障害を気にしない) 障害を学ぶ(障害について学びたい、医学的な理解が必要、療育には父親の理解が絶対必要、講習会にまた参加した)
	子どもに願うこと	将来のこと(一人で生きていけるように) 今のこと(自分のペースでゆっくりと成長を、少しずつ言っていることがわかってきているので早く喋れればよい)
	他の父親との繋がり	他の父親に聞いてみたい(他の児の具体的な様子や改善のきっかけや手掛かり、接し方、遊び方、しつけ等) 父親同士の繋がり(気持ちを知りたい、情報交換をしたい)
支援者やサービスへのニーズ	精神的ケア	親の気持ちを支える(心のケア、話を聞いてほしい)
	発達障害児に関すること	学びたい内容(障害に関する知識、制度、関わり方、療育の方法) 学ぶ方法(講習会、勉強会)
	父親同士が繋がる機会	父親同士のつながり(父親が集まるイベント、交流を深め情報交換をする、父親間のコミュニケーションが必要)

### (2) 二次調査

一次調査結果をベースに発達障害児に関する父親・母親の認識や育児状況、育児に関する社会との関係を調査した。基本属性は表3に示す。

表3 対象者の基本属性(2次調査)

		父(N=84)	母(N=100)
年齢 <sup>1)</sup>		40.7±8.8	37.7±5.4
学歴 <sup>2)</sup>	高卒	17(20.2)	21(21.0)
	専門学校・短大卒	23(27.4)	43(43.0)
	大学卒以上	42(50.0)	36(36.0)
就労状況 <sup>2)</sup>	就業していない	1(1.2)	53(53.0)
	就業している	83(98.8)	47(47.0)
健康状態 <sup>2)</sup>	良い	75(89.3)	83(83.0)
	悪い	8(9.5)	2(2.0)
	どちらともいえない	1(1.2)	15(15.0)

1) 平均値±SD

2) 実数(%)

調査の結果(表4)、発達障害児の特性に関する認識は差がなかった。しかし、児の理解に関する認識では、得意なこと、頑張っていることを知っている、子どもの頑張りや努力を誉めてあげたいと思う、子供の成長を促す関わりを心がけているという点で母親有意に差がみられた。子供を理解しようと努力するという心がけは差がみられなかった。父親は子どもを理解しようと努力しているが、まだ理解が十分でない状況が伺えた。

児の特性への対応では、関心・注意を他に向ける、自らがその場を立ち去る、要求が気を引く行動か判断し気を引く行動であれば無視をするという項目に有意差がみられた。すべての項目が母親有意であったことから、父親たちは、療育の知識が必要な対応方法を実施できていない状況にあることが伺えた。また、発達障害児の育児に関する意識では父親に比較すると母親は発達障害児の育児に積極的に関わっているという実感を持ち、可

能な限り育児に関わろうと努力しているという結果であった。育児ストレスでは、母親の方が社会の差別意識や配偶者の育児の不十分さ、子どもの困ったときの自身の対応の不十分さ、配偶者との育児の方向性の相違についてストレスと感じていた。

表4 発達障害児に関する父親・母親の認識や育児状況、育児に関する社会との関係の相違

発達障害児の困った行動に関する認識	父(N=84)		p値
	(平均値±SD)	(平均値±SD)	
対人関係のトラブルがある	1.9 ± 0.32	1.9 ± 0.31	1.000
コミュニケーションがとれない	1.5 ± 0.50	1.6 ± 0.50	0.480
言葉が出ない	1.5 ± 0.50	1.5 ± 0.50	0.480
パターン化した行動がある	1.7 ± 0.47	1.6 ± 0.49	0.480
不注意	1.8 ± 0.42	1.7 ± 0.44	1.000
こだわりが強い	1.5 ± 0.50	1.5 ± 0.50	1.000
意思疎通が困難	1.7 ± 0.47	1.7 ± 0.47	0.480
パニック	1.9 ± 0.34	1.8 ± 0.38	1.000
感覚過敏	1.8 ± 0.39	1.7 ± 0.44	0.480
集中力がない	1.7 ± 0.48	1.6 ± 0.49	1.000
集団行動がとれない	1.7 ± 0.48	1.7 ± 0.47	0.157
衝動性	1.8 ± 0.37	1.7 ± 0.44	0.157
多動性	1.6 ± 0.49	1.6 ± 0.49	1.000
その他	1.9 ± 0.24	1.9 ± 0.32	1.000
発達障害児の理解			
子どもが喜ぶことを知っている	3.3 ± 0.55	3.5 ± 0.54	0.012*
子どもが頑張っていることを知っている	3.2 ± 0.68	3.5 ± 0.58	0.001**
子どもの得意なことを知っている	3.1 ± 0.73	3.4 ± 0.69	0.002**
子どもの好きな物等を知っている	3.4 ± 0.62	3.6 ± 0.53	0.004**
子どもの頑張りを誉めてあげたいと思う	3.6 ± 0.54	3.8 ± 0.45	0.006**
子どもの成長を促す関わりを心がけている	3.1 ± 0.66	3.4 ± 0.59	0.001**
子どもに合わせて対応をとるように心がけている	3.1 ± 0.57	3.3 ± 0.58	0.036*
子どもを理解しようと努力している	3.4 ± 0.58	3.5 ± 0.59	0.191
発達障害児が親にとって困った行動をした時の対応			
叱責する	2.4 ± 0.99	2.8 ± 0.87	0.014*
体罰を与える	1.7 ± 0.84	1.7 ± 0.81	0.879
関心・注意を他に向ける	2.6 ± 0.88	3.0 ± 0.78	0.006**
子どもが嫌いな活動(感覚)等から逃れさせる	2.5 ± 0.86	2.6 ± 0.87	0.495
子どもが好きな活動(感覚)を行う	2.9 ± 0.80	3.0 ± 0.66	0.619
要求か気を引く行動か判断し気を引く行動であれば無視をする	2.0 ± 0.78	2.3 ± 0.86	0.012*
自らがその場を立ち去る	1.6 ± 0.65	2.0 ± 0.92	0.001**
発達障害児の育児をする意識と抱える問題			
意識			
育児に積極的に関わっている	2.9 ± 0.71	3.7 ± 0.51	0.000**
可能な範囲で育児に関わろうと努力している	3.3 ± 0.55	3.7 ± 0.50	0.000**
父親/母親ならではの育児をしようという意識がある	3.0 ± 0.78	3.2 ± 0.82	0.061
ストレス			
子供の成長を感じられないことにストレスを感じる	2.8 ± 0.82	3.1 ± 0.85	0.039
子どもの困った行動に対してうまく対応できないことがストレスに感じ	2.2 ± 0.90	2.5 ± 0.97	0.042*
他の子と比較我が子が否定的に思うことにストレスを感じる	2.2 ± 0.90	2.4 ± 0.97	0.149
配偶者との育児の方向性が異なることにストレスを感じる	1.9 ± 0.82	2.2 ± 1.00	0.043*
ワークライフバランスがうまく保てないことにストレスを感じる	2.3 ± 0.96	2.5 ± 0.98	0.275
我が子に対する社会の差別的意識にストレスを感じる	1.9 ± 0.81	2.4 ± 0.94	0.000**
自身が持つ発達障害への差別的意識にストレスを感じる	1.7 ± 0.71	1.9 ± 0.76	0.096
配偶者の育児が不十分なのにストレスを感じる	1.5 ± 0.72	2.2 ± 0.94	0.000**
不安			
子どもとの関わり方について不安に思う	2.2 ± 0.96	2.4 ± 0.97	0.128
子どもの今後の成長が不安に思う	3.1 ± 0.84	3.3 ± 0.79	0.023*
自身の仕事による子どもへの影響が不安に思う	2.2 ± 1.00	2.0 ± 0.96	0.165
子供の就園・就学後の生活が不安に思う	3.1 ± 0.89	3.3 ± 0.81	0.040*
将来自立した生活が送れるかどうか不安に思う	3.3 ± 0.88	3.6 ± 0.69	0.022*
発達障害児の育児に関する社会との関係性			
配偶者との関係は良好である	3.2 ± 0.69	3.2 ± 0.89	0.747
配偶者に子ども(発達障害児)に関する相談ができる	3.4 ± 0.66	3.2 ± 0.89	0.362
実父母に子ども(発達障害児)に関する相談ができる	2.9 ± 0.95	3.0 ± 0.97	0.270
義父母に子ども(発達障害児)に関する相談ができる	2.6 ± 0.97	2.2 ± 1.12	0.011*
親戚に子ども(発達障害児)に関する相談ができる	1.9 ± 0.82	2.0 ± 1.04	0.758
友人に子ども(発達障害児)に関する相談ができる	2.1 ± 0.84	2.6 ± 0.98	0.004*
療育を通じて出会った友人に子ども(発達障害児)に関する相談ができる	2.2 ± 0.89	3.1 ± 0.79	0.000**
勤務先に子ども(発達障害児)に関する相談ができる	2.1 ± 0.92	1.8 ± 1.05	0.018*
近所や地域の住民に子ども(発達障害児)に関する相談ができる	1.8 ± 0.66	1.7 ± 0.87	0.232

1) Mann-Whitney U検定 平均値(±SD) P<0.05\*\*<0.01  
2) とてもあてはまる4点～あてはまらない1点の4件法で算出

ソーシャルサポートの利用状況から父親は情報的サポートをすべて配偶者から受けていた。母親は療育を通じて知り合った友人や医療機関、福祉機関、友人で有意に差が出ており(p<0.01)、父親はサポートを受ける手段が限局されていた。

情緒的サポートについても同様に父親は

配偶者が唯一のサポートを受ける相手であることに對し、母親は実母や友人、療育を通じて出会った友人、医療機関、福祉機関など多くの手段を利用していた。

評価的サポートでは、実母、友人、福祉機関、医療機関、療育を通じて出会った友人に有意差がみられたがすべて母親有意で父親は配偶者のみであった。

道具的サポートでは育児の手伝いは母方祖母が担うことが多く、家事手伝いは母親が担っていることが伺えた。仕事や職務に関しては、父親が就労していることが大半である背景からも実際に職場の仲間や上司から受けていることが分かった。

発達障害児の父親の多くは、生活上の世話やしつけ等を中心に育児を担っていた。また、配偶者からのアドバイスや児との関わりをとおして障害や児の特徴に理解を示していた。そして、療育的な関わりや心持ちで児と接し、父親自身も成長していることが考えられた。しかし、児の理解や育児等に不十分さがあり配偶者からストレスと捉えられていることも伺えた。実際、父親はソーシャルサポートを受ける手段が母親に比較すると少ない状況にあり、サポート相手が配偶者に限局していることや“父親同士のつながり”と“学ぶこと”をニーズとして求めていることから父親への育児支援体制整備やピアサポートの実施の必要性が急務であることが明確になった。

<引用文献>

- 1) 今井充子, 常盤洋子: 我国の行政による子育て支援の視点と課題に関する文献検討, 北関東医学雑誌 61, (3), p377-386, 2011.
- 2) 日本家族心理学学会編: 家族のストレス, p117-118. 金子書房. 2009.
- 3) 文部科学省: 発達障害者支援法. Online; 2005. アクセス日時 2017年3月6URL: www.nwxt.go.jp/a-menu/shotou/tokubetsu/material/001.htm
- 4) 岡野維新, 武井祐子, 寺崎正治: 広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスと父親に対するサポート, 川崎医療福祉学会 21, (2), p218-224, 2012.
- 5) 小尾栄子, 文殊紀久野: 広汎性発達障害児を育てている家族への支援 第一報～山梨県下で保健師が行う乳幼児期支援の実際から～, 小児保健研究 70, (5), p637-645, 2011.
- 6) 石橋君子: 夫婦の意識が相互の育児不安に及ぼす影響. 母性衛生 2002; 43: 547
- 7) 太田顕子: 発達障害のある幼児児童を育てる母親のソーシャルサポートに対する認識・家族、仲間及び専門機関からの支援に注目して-, 幼年児童教育研究 第22号 2010; 37:
- 8) 山下亜紀子: 発達障害児の母親が抱える生活困難についての研究. 日本社会精神医学会雑誌 2013; 22: 245:
- 9) 藤田千春: 自閉症スペクトラム障害があ

る児の母親が就学前後に認知したソーシャルサポート．国際医療福祉大学学会誌  
2014；19；22-23：

## 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

石田史織、高橋宏子、五十嵐久人、療育センターを利用する発達障害児の成長を支える父親の役割、第38回長野県看護研究学会論文集、査読有、2018、7-10

〔学会発表〕(計 1件)

石田史織、療育センターを利用する発達障害児の成長を支える父親の役割、長野県看護研究学会、2017

## 6．研究組織

(1) 研究代表者

石田 史織 (Ishida, Shiori)

信州大学・学術研究院保健学系・助教

研究者番号：20710065